

第四回 加藤周一『羊の歌』講読会

「病身」『羊の歌』 p.37-49

西澤忠志

凡例

- ・太字は発表者によるもの
- ・ゴシック体は『羊の歌』本文からの引用
- ・ページ数は旧版を使用し、ページ数および行数を表す
- ・略字は以下の事項を示す p. (ページ数)、pp. (複数ページ数)、l. (行数)、c.f. (参照)、e.g. (例)、…… (省略)
- ・旧漢字、旧仮名遣いは適宜、新漢字、新仮名遣いに書き直した

I. 梗概

● 読解のための標準軸

① 加藤周一の活動、思想の萌芽

外へ出て遊ぶことの少ない子供は、容易に字を覚えた。そして文字を覚えると共に、病気の回復期の私にとっての意味は、全く変り、もはや何日寝たきりでも、退屈するということは、なかった。(……) 子供の私が、健康で身体の自由のきくときに、読書だけを、唯一の楽しみとしていたのではないことは、いうまでもない。(……) その習は性となり、今でも私は自分にいい聞かせることがある、「本を読んでいるは、本を書く暇がないだろう」と。(p.40,l.5-10)

② 加藤周一にとっての母親(織子)の存在

● 前章との関係性

- ・幼稚園～小学校
- ・「病弱でしつけよく、人の愛情に敏感で、奇妙な正義感にあふれ、他人との付き合い方をまったく知らず、自尊心が強くて、おそらく可愛気のない子供 (p.37,l.4-6)」が、どのようにして科学的な知を手に入れ、どのように消化されていったのか

● 全体の構図(発表者による区分)

1. 病床での体験1…母親を中心に(音の世界での加藤周一)
2. 父方の従兄、母方の伯父との関係
3. 病床での体験2…原田三夫と兼常清佐を中心に(本の世界での加藤周一)
4. 父親との関係の変化

II. 内容講読

1 病床での体験 1…母親を中心に（音の世界での加藤周一）

私は高熱と悪夢¹を恐れ、父のあたえる苦い薬やひまし油²を拷問のように感じていたけれども、熱の下った後の数日をたのしんでいなかったわけではない。医者の父は「ぶり返し」を避けることに慎重で、病が回復に向ってからも、ながい間子供に外出を許さなかった。しかしその間、母の至れり尽くせりの世話を〔、母を³〕独占できるという無上のよろこびもあった。（p.37,l.7-10）

・父親の世話＝拷問のように感じる⇔母親の世話＝独占できる無上のよろこび（愛の強調⁴）

→父親と母親に対する距離感の違い。【②】

私の病室は金王町⁵の家の西の端にあり、六畳の小さな部屋であった。（……）父はそこへ一日に一度診察にやって来た。しかし母は、食べものをはこんだり、薬を飲ませるためにたびたび来て、ときにはそのまま枕元に坐り童話を読んでくれることもあった。『猿かに合戦』や『浦島太郎』の話、また赤頭巾や森の眠り姫や小公子の物語を私はそうして聞いたのである。母が病室を去ると、（……）私は寢床のなかで途中まで聞いた話の先を空想しながら（……）なすこともなく一日が過ぎてゆくのを眺めていた。（p.37-38,l.12-6）

童話を聞き、後の話を空想すること…「音の世界」での空想へ

またそういうときに、遠く離れた部屋で母の弾く琴を聞くこともあった。家には小さな鉱石通信機があった。しかしそれは上手に操作すると、やっと何かが聞こえるという程度のもので、音楽を楽しむことなどは思いもよらなかった⁶。また大きならっぱのついた手廻しの蓄音機は「西洋かぶれ」の祖父がもっていた⁷が、まだ多くの家庭では使われていなかった。私の音楽とのつき合いは、おそら

¹ 「合理的な秩序」や「理解することのできる世界の破壊（p.36,l.9-10）」（c.f.「渋谷金王町」）を指す。

² 「トウダイグサ科のトウゴマ（ヒマ）の種子から圧搾法で採油される不乾性油。ひまし油はエタノール（エチルアルコール）に溶解するから、アルコール性頭髪油として用いられる。またポマードにも使用される。下剤。」福住一雄，幸保文治「ひまし油」『日本大百科全書（ニッポニカ）』

³ 〔 〕は『朝日ジャーナル』掲載時に書かれていたが、岩波新書で出版された際に削除された部分。加藤周一「羊の歌4」『朝日ジャーナル』8巻49号，1966，p.60

⁴ 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか——『羊の歌』を読みなおす』岩波書店，2018，p.163

⁵ 金王町…現在の渋谷2丁目

⁶ 「雑音ばかりでなく、「JOAK」という人語が聞こえることに驚いた」（加藤周一『20世紀の自画像』ちくま新書，2005，p.13）と回想しているように、音楽を楽しむというよりは、そこからどのような音が聞こえてくるかを楽しんでいたと考えられる。

⁷ 加藤周一の祖父、増田熊六は《リゴレット》のアリアやカルーソーなどのレコードを持っていた（加藤周一『過客問答 加藤周一対話集別巻』かもがわ出版，2001，pp.127-128）。おそらく、それらのレ

く母の琴の音をもってはじまったのであろう。その音の流れに、心をわきたせるものはなかった。しかし、私は琴の音色を好んでいたし、今でも好んでいる。父は尺八を吹いていた。しかしその尺八は、心の中のどのようなよろこびや悲しみとも、呼応するものではなかった。(p.38,l.6-13)

- ・加藤周一にとっての「琴」…「音の流れ」には「心をわきたせ」られず
 - ・日本音楽にとって重要なのは、流れ(全体の構造)ではなく、各瞬間の音色や「間」⁸という認識【①】
- ・日本音楽…琴、尺八、いずれも楽しめなかったが、母親の弾く琴の音色を好む
 - ・母への愛の強調【②】

私が音楽と私自身の感情生活とのつながりを見出すようになったのは、小学校へ通い、世にいわゆる「歌謡曲」というものを知ってからだと思う。『酒は涙か溜息か⁹』や『枯れすすき¹⁰』は、実に深く私を感動させた。おそらくその頃から山田耕筰¹¹も、私の世界にあらわれようとしていたのかもしれない。(p.38,l.13-17)

- ・《酒は涙か溜息か》、《枯れすすき》に対する感動
 - ・《酒は涙か溜息か》…『日本文学史序説』での大伴旅人「酔泣¹²」に現れた旅人の挫折感、疎外感との共通性¹³を読み解く¹⁴

コードをかけるために、蓄音機が置かれていたのだろう。

⁸ 加藤周一「日本の美学」『加藤周一著作集 12』平凡社、1978、p.32(初出『世界』11月号、1967)、加藤周一『日本文化における時間と空間』岩波書店、2008、p.81

⁹ 高橋掬太郎作詞、古賀政男作曲による流行歌。昭和6年(1931)に発表。歌った藤山一郎の出世作となった。

¹⁰ 野口雨情作詞、中山晋平作曲による流行歌。大正10年(1921)ごろから関東大震災のあった大正12年にかけて大流行。「船頭小唄」が正式名だが、俗称として「枯れすすき」と呼ばれた。

¹¹ 山田耕筰(1886—1965)

作曲家。東京に生まれる。関西学院を経て1908年(明治41)東京音楽学校本科声楽科卒業、10年から13年ベルリン高等音楽学校に留学し、作曲を学ぶ。帰国後15年(大正4)に東京フィルハーモニー会内に管弦楽部を組織・指揮、20年には日本楽劇協会をおこして、日本における交響楽やオペラの確立を目ざした運動を進める。また22年北原白秋と『詩と音楽』を創刊、詩と音楽の融合を図り、日本語の語感を生かした歌曲の普及による国民音楽樹立運動をおこすなど、生涯にわたって日本の音楽界の指導的役割を果たし続けた。船山隆「山田耕筰」『日本大百科全書(ニッポニカ)』

¹² 「賢しきと物いふよりは酒飲みて酔泣するしまさりたるらし」

¹³ 加藤周一『日本文学史序説 上』筑摩書房、1975、p.78

¹⁴ こうした周囲から疎外された状況を《酒は涙か溜息か》から読み解いたことを前提に、「真面目な冗談」中の「酒は涙か溜息か」は書かれたのだろう。

- ・《酒は涙か溜息か》、《枯れすすき》に対する感動…周囲との疎外¹⁵に対する共感¹⁶
 - ・両方とも遂げられなかった恋を題材とした歌…母に対する恋（エディプスコンプレックス的状况）
 - ・詩歌を受容することによる、孤独感の補完という側面【②】
 - ・歌謡曲の愛好→山田耕筰¹⁷が現れる
 - ・《酒は涙か溜息か》、《枯れすすき》…七五調を基本とする歌謡曲
 - ・山田耕筰の歌曲…詩と音楽の融合を図り、日本語の語感を生かした歌曲の創作を企図（e.g. 《からたちの花》、《この道》、《赤とんぼ》）
- 詩の音を活かす日本語による韻文定型詩の創作（マチネ・ポエティック）へ【①】

私が金光町の家で寝ながら聞いたのは、琴の音だけではなかった。(……)一種の「具体音楽 la musique concrète¹⁸」から、私の音楽生活がはじまろうとした(……) 童話を聞き、まだ聞かない話を想像し、同じ庭の植え込みを何度も眺め、天井板の木目をあらゆる細部まで観察し、しかし時間をもて余して、六畳の部屋の外の世界からやってくるすべての音に耳を澄ませていた。音楽のなかで生きてはいなかったにしても、少なくとも、音の世界のなかに住んでいたのである。(p.39,l.1-7)

- ・病身の加藤の環境＝「音の世界」…「想像力」、「視覚」、「聴覚」を刺激するもの
 - ・「音の世界¹⁹のなか」での加藤周一→音による想起 (p.39,l.7-13)
 - ・母親の足音→期待
 - ・台所での物音→食べ物についてのすべての考え
 - ・玄関の戸の開く音→父親が往診から出かけるか外から帰ってきた知らせ
 - ・物売りの声→働いて生きている男たちの、さまざまな息遣い

これらの音は、「ヴェルレーヌがうたった「街のざわめき」から、本質的に異なるものではなかったろう。」(p.40,l.2-3)

ヴェルレーヌの「街のざわめき」…《Sagesse》(『叡智』)から²⁰

¹⁵ 例えば、幼稚園で周囲の子供たちと全く打ち解けようとしなかったように、他人との付き合い方を知らない子供として育っていた。(c.f.「渋谷金王町」)

¹⁶ この疎外状況に対する共感、後に源実朝を論じる中にも表れてくる。

¹⁷ 山田耕筰について、加藤周一はほとんど論じていない。例えば、『日本文学史序説』では北原白秋の詩に作曲をした人物として名前が挙がっているだけである。(加藤周一『日本文学史序説 下』筑摩書房、1980、p.436)

¹⁸ 「非楽音（鉄道の音、人の話し声、動物の鳴き声、自然界の音など）を録音し、機械的、電氣的な処理を加えて変質、重複して構成された音楽。具体音楽と訳される。」細川周平「ミュージック・コンクレート」『日本大百科全書（ニッポニカ）』

¹⁹ 「人間の肉声があふれていた」(p.39,l.14-15) 音の世界を指す

²⁰ 鈴木信太郎『筑摩世界文学大系 48 マラルメ、ヴェルレーヌ、ランボオ』筑摩書房、1974、p.156

2019年12月14日(土) 於 立命館大学 平井嘉一郎記念図書館

Le ciel est, par-dessus le toit,
Si bleu, si calme!
Un arbre, par-dessus le toit,
Berce sa palme.

屋根の上なる 大空は
青し、静けし
屋根の上なる 棕櫚の樹は
枝を揺すれり

La cloche, dans le ciel qu'on voit,
Doucement tinte.
Un oiseau sur l'arbre qu'on voit
Chante sa plainte.

見あぐる空に 寺の鐘
和やかに鳴る。
見あぐる梢に 憩ふ鳥
嘆きを歌ふ。

Mon Dieu, mon Dieu! la vie est la,
Simple et tranquille.
Cette paisible rumeur-la
Vient de la ville.

あはれ、彼方ぞ 人の世は
静かに、純く。
この安らかなどよめきは
町より来る。

Qu'as-tu fait, o toi que voila
Pleurant sans cesse,
Dis, qu'as-tu fait, toi que voila,
De ta jeunesse?

ここに居て絶えず泣く身よ
そも何を為し
ここに泣く身よ、如何に為し
きみが青春

- ・ヴェルレーヌがうたった「街のざわめき」=町の「安らかなどよめき」
牢屋の中のヴェルレーヌ=病床の加藤…世間との距離感 (c.f. 「土の香り」、「一九四一年十二月八日」
『青春ノート NOTESⅧ 1941年5月-1942年4月』)

それはまだ音楽ではなかった。しかし音楽に向って私を準備するものであったにちがいない。
(p.40,l.4)

- ・加藤の言う「音楽」とは?
 - ・加藤周一の音楽論…e.g. 「音楽の思想」(1972)
「音楽とは何か」という問いに対する解答として音楽作品を位置づけ、作品の「形」に現れた「思想」
によって、「同時代性」を感じることができる²¹。
 - ・音楽=音楽作品²²…「音楽」の定義までは言及せず

²¹ 加藤周一「音楽の思想」『加藤周一自選集5』岩波書店、2010、3-7 (初出『思想』1972年1月号)

²² 「音楽の思想」では具体例として、小倉朗《ヴァイオリン協奏曲》や武満徹《カシオペア》といった、音楽作品があげられている。

- ・音楽論はあくまで、加藤周一のメインテーマではない²³
- ・『羊の歌』での「音楽」：加藤独自の意味
- ・加藤が他分野の芸術評論の中で「音楽」について言及したもの…「象徴主義的風土」（1947）²⁴

神秘主義を通じて、すでにボードレールの「緑の闇」は十字架の聖ヨハネ²⁵Juan de la Cruz の「暗い夜²⁶」に通じていた。

暗い夜の間

不安にみちた愛に抱かれ、……

しかし、この不安は、ヴェルレーヌ Verlain の牢獄において、類いまれな音楽となった。原罪の意識は「何よりも先ず音楽²⁷」という美学と共に、流浪の神秘家の魂を充している。(……) 自然のなかに神の手の痕を見るよりも、神そのものに直面し、もし神の面を見なかったとすれば、少なくとも己が罪の深さを見た。(……)『智慧』の詩人の心のそこには、個性的ななにもものかではなく、却て普遍的な人間の罪と超越的な神の恩寵とがあった。祈り、神とする孤独な対話、うち慄える魂の微妙な息づかいが、ヴェルレーヌの「音楽」であり、神秘主義的な体験の形式である²⁸。

- ・ヴェルレーヌの「音楽」（加藤周一の解釈）…「祈り、神とする孤独な対話、うち慄える魂の微妙な息づかい」、
- ・「個性的ななにもものか」（ロマン主義）ではなく「普遍的な人間の罪と超越的な神の恩寵」（象徴主義²⁹）との対話を重視

²³ 加藤周一が音楽をテーマに書いた評論は、「音楽の思想」、「小倉朗または音楽の現代」などの短文が多い。また、加藤は、音楽を中心にした本を著していない。

²⁴ 加藤周一「象徴主義的風土」『加藤周一自選集 1』岩波書店、2010、pp.120-150（初出『花』1947年11月号）

²⁵ スペインのキリスト教神秘家、詩人、聖人。通常「十字架の聖ヨハネ」の名で知られる。マドリードの北西アビラ県フォンティベロス出身。1563年、21歳のときカルメル会に入って聖職の道を歩むが、自ら積極的に進めた同修道会刷新運動がもとで逮捕され、約8か月後に決死的な脱獄を果たし、執筆活動と宗教活動を続ける。神との一致という主題をみごとな隠喩を駆使して甘美な恋愛詩に仕上げた代表作『聖霊頌歌』（1584）は、近代の詩人たちへの影響が大きい。清水憲男「クルス」『日本大百科全書（ニッポニカ）』

²⁶ 「暗夜（noche oscura）」の中の一節

²⁷ 1882年発表のヴェルレーヌ「詩法（Art poetique）」の中の一節

²⁸ 加藤周一「象徴主義的風土」『加藤周一自選集 1』岩波書店、2010、p.127

²⁹ 狭義には、1885年ごろから世紀末にかけてパリを中心に、高踏派や自然主義の文学への反発からおこった文学運動。だが広義には、19世紀後半から20世紀前半に及ぶ一つの文芸思潮と考えられる。20世紀の代表的な象徴派の詩人ポール・ヴァレリーは「象徴主義は一つの流派ではない」といったが、象

・象徴主義にとっての「音楽」…「音楽の富」の重視（加藤周一の解釈：耳に響きがよいこと、ある観念を想起させるもの）を持つもの

・小結

- ・母親を経由した体験…中心になるのは、「音」の世界を通じた「音楽」体験
- ・「音楽」体験が与えた、加藤周一のその後の活動に対する意義…象徴主義に基づく韻文詩の創作

2 従兄、伯父との関係

その頃金王町の家には、二階の一部屋に、父の姉の長男が住んでいた。田舎から出てきて早稲田大学へ通っていたこの従兄は、大きな身体をしていて、力が途方もなく強く、大学の剣道部の主将をしていた。(p.40,l.15-16)

- ・「父の姉の長男」=新井光彌³⁰、早稲田大学在学中、加藤家に寄宿していた³¹
- ・新井光彌が実際に早稲田大学剣道部の主将を務めていたかは不明。また、段位は『羊の歌』では4段とされているが、実際には2段だったらしい³²

→力強さを強調するためか

父には窮屈な思いをしていたらしいが、母にはうちとけて、大学から早く帰ってくると、お茶を飲みながら、長い間母と話していて、なかなか自分の部屋へひき上げようとしなかった。子供好きで、散歩に出ると、両手の小指に私と妹とをぶら下らせ、地面からひき上げて歩いてみせたりした。(……) 子供を好きだったにはちがいない。しかし、それ以上に母を好きだったのかもしれない。私はこの従兄を崇拜していた。彼は私の知っているすべての人間よりもくらべものにならないほど力が強く、母にはやさしく、子供にはこの上もない遊び相手だった。(p.41-42,l.16-3)

- ・母親に対し、親しくすることへの嫉妬

徴主義をひとことで定義づけることはむずかしい。『象徴主義 挿話と思い出』(1903)の著者で詩人のアドルフ・レット Adolphe Retté (1863—1930)も、象徴派の詩人たちに個別に質問すれば、「質問された人間の数と同じだけの定義が戻ってくる」と語っている。こうした意味で、レミ・ド・グールモンの「芸術における個人主義の表現」(『仮面の書』1896～98)という定義は、もっとも正鵠を射ているように思われる。窪田般彌「象徴主義」『日本大百科全書(ニッポニカ)』

³⁰ 「青春ノート」中の「NOTE II 余り気の利かない覚書」に結婚仲介業を営む「船橋氏」のうわさをする人物として出てくる。そこで新井光彌は「甘貫にわたる巨漢」、「私立大学は出たけれど田舎で農家の若旦那に納まっているある」人物として紹介されている。

³¹ 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか——『羊の歌』を読みなおす』岩波書店、2018、p.75

³² 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか——『羊の歌』を読みなおす』岩波書店、2018、p.75

道玄坂で酔っぱらいに絡まれたとき、従兄が酔っぱらいを追い払ったエピソード (p.41,l.8-p.42,l.3)

剣道は四段でも、柔道の方は大した腕ではない、といつも自分ではいていたが、力が強かったから、なんの心得もない男の二人や三人は、楽に叩きつけることができただろう。叩きつけられた方は、うちどころが悪ければ、どうなっていたかわからない。(p.42,l.3-5)

- ・ 相手を一方的な悪と思わず、「どうなっていたのだろうか」という想像力を働かせる
- ・ 「歴史・社会、人間の生理・心理学的機構についての情報不足、無知」による、「特定の価値を信じて勇氣ある人間を尊敬しない」態度³³=相手を慮る「相対主義」へ【①】

私は彼を崇拜はしていたが、彼のように強い男に自分になれるだろうとは考えていなかった。(……)むしろ従兄の圧倒的な腕力は、私自身と他の子供との腕力の差を、無視できるほど小さなものにするために役立ったといえるだろう。そう考えることは、むしろ、私にとって都合がよかった。(p.43,l.1-4)

- ・ 従兄 (=力強いもの = 「男性的」なもの) へのあこがれと、現実との距離感の把握、それをういた周囲への認識に対する無視 (=他力本願的な態度)

腕力だけではない。権力についていえば、私の父には全くの権力もなかった。代議士の伯父が知事になったとき、多勢の役人が伯父のまえに平伏するのに、私はおどろき呆れてものもいえなかった。(……) 私はそこに伯父の測り知れない力を感じたけれども、それをただ異様な他人事としてみただけで、少しも羨ましいとは考えなかった。(p.43,l.5-11)

- ・ 伯父 = 藤山竹一³⁴
藤山家に対する対抗意識
e.g. 従兄、藤山檜一に対し好意を持っていないこと³⁵

私は世人が「男性的」とよぶだろうもの(……)を、はじめからあきらめ、そこに格別の魅力も感じないで育った。むしろ優しく、微妙なもの、おそらく「女性的」といわれるだろうもののすべてを、愛していたのだろう。(p.43,l.12-15)

³³ 加藤周一「私の立場さしあたり」『加藤周一著作集 15』平凡社、1979、p.304 (初出「(3) 信念について」「強き者」を好まず わが思索わが風土」『朝日新聞』夕刊 1972 年 1 月 18 日、p.5)

³⁴ 藤山竹一 (1885-1930) 日本の内務・警察官僚。政友会系官選県知事。1910 年 7 月、東京帝国大学法科大学法律学科を卒業。1927 年 5 月、大分県知事に就任。1928 年 6 月、栃木県知事に転任。

³⁵ 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか——『羊の歌』を読みなおす』岩波書店、2018、p.33

・「男性的」(腕力、権力) …従兄、伯父

加藤自身、加藤家はそうした「男性的」なものを持っていない

→「男性的」なものを求めることに対する諦め

「女性的」なものへ【①】

・小結

・父方の従兄と母方の伯父との関係…表面的な関係性の上では対照的 (c.f. 「祖父の家」、「土の香り」)

・父方の従兄と母方の伯父との共通性…「男性的」なものを持つ

・「女性的」な存在としての自信の位置づけ

3 病床での体験…原田三夫と兼常清佐を中心に (本の世界での加藤周一)

子供の頃病床で私はどんな本を読み慣していたのだろうか。私は今二人の著者の名まえしか覚えていない。そのひとりには原田三夫³⁶であり、もうひとりには兼常清佐³⁷である。(p.43,l.16-17)

原田と兼常…対照的に扱う

3.1 病床での体験…原田三夫を中心に

原田三夫は、自然科学的な知識の解説を仕事として、子供のために沢山の本を書いていた。そのおかげで、小学校に通いはじめた頃の私は、人間の身体が細胞から成っていること、多くの病が細菌によっておこること、人類の祖先と猿の祖先とは同じものであるというようなことを知った。私にとって最初の英雄は、日本武尊でもジークフリートでもなく、チャールズ・ダーウィンという名の英国人だった。私が最初に覚えた^{ラテン}羅語は、ピテカントロプス・エレクトゥス (直立猿人) という言葉だった。(p.43-44,l.17-6)

・原田三夫の著作…100冊以上の著作

e.g. 『子供の聞きたがる話——最新知識』の「1 発明発見の巻」「2 天文地文の巻」「3 動物植物の巻」

³⁶ 原田三夫 (1890–1977)

大正一昭和時代の科学評論家。明治 23 年 1 月 1 日生まれ。北海道帝大講師などをへて、大正 12 年「科学画報」、13 年「子供の科学」の創刊にかかわる。叢書「子供の聞きたがる話」など 100 冊以上の啓蒙的著作がある。昭和 28 年日本宇宙旅行協会を設立し、会長となった。『日本人名大辞典』

³⁷ 兼常清佐 (1885–1957)

音楽学者。山口県萩市生まれ。1910 年 (明治 43) 京都帝国大学文学部卒業。平家琵琶、地歌三味線などの理論研究で学位を取得。15 年 (大正 4) 東京音楽学校ピアノ科入学。22 年渡独、帰国後、大原労働研究所で音響学を研究。評論、随筆の面でも活躍し、『ピアニスト不要論』など逆説的論議で楽壇をにぎわした。柴田典子「兼常清佐」『日本大百科全書 (ニッポニカ)』

「4 電気磁気の巻」「5 化学工業の巻」「6 生理衛生の巻」「7 探険冒険の巻」「8 鉱物岩石の巻」「9 珍談奇談の巻」

- ・世界に対する科学者の立場からの視点の提示
- ・加藤にとっての最初の英雄…チャールズ・ダーウィン
 - ・日本武尊、ジークフリート…ある目的のために戦った伝説上の人物
 - ・チャールズ・ダーウィン…人間の起源を探った人物
- ・ある目的のために行動（秩序の変革、維持）するのではなく、ある事象に対する起源、秩序を探ろうとする問題意識の共通性【①】

私は好奇心にあふれていて、しかも周囲の世界と何らの交渉ももっていなかった。世界は変えられるためではなく、まさに解釈されるためにのみ、そこにあった。私の原田三夫は、その世界の正確な解釈をあたえなかったかもしれないが、少なくとも正確であるかのような解釈の錯覚をあたえたのである。それはほとんど詩的な感動であり、どんな物語も容易にうち負かすことのできないようなものであった。(……) 進化論からはじめた私が、神話の意味を見出すのにも、おそらくながい時間がかかるだろう (p.44,l.9-14)

- ・「世界は変えられるためではなく、まさに解釈されるためにのみ、そこにあった」
 - ・マルクス＝エンゲルスの『フォイエルバッハ論』を踏まえた言葉³⁸…「哲学者」ではなく、「科学者」としての自分を強調
 - ・1930年代にマルクス主義の影響を受け、加藤の歴史や社会の理解の枠組みとなる唯物史観³⁹を受容する背景としての「科学的な知」

社会科学的なもうひとりの原田三夫がいたら、私は宇宙の構造に対してと全く同様に、黒人アフリカの部落の構造に対しても、好奇心を刺激されていたことであろう。私の最初に覚えた外国語は——それは呪文のような響きを備え、神秘的な雰囲気を伴っていたのだが——(……) 共同体を意味する現代の西洋語、ゲマインシャフトであったかもしれない。しかしそれは大きなちがいでなかった (p.44-45,l.15,1,3)

- ・「社会科学的なもうひとりの原田三夫がいたら」興味を持っていたかもしれないこと
 - ・「黒人アフリカの部落の構造」…レヴィ＝ストロースの構造主義⁴⁰を前提とする

³⁸ 「哲学者たちはこれまで、世界をさまざまに解釈してきただけである。肝心なのは、世界を変革することである。」(マルクス＝エンゲルス、渡邊憲正訳『フォイエルバッハ論』大月書店、2010、p.43)

³⁹ 岩津航「」

⁴⁰ 「1960年代、フランスを中心に現れた、諸科学における新しい考え方の総称。(……) この考え方の特徴は、可変的な表層的諸現象の背後に隠された深層的で不変な「構造」を探究するということにある。(……) レヴィ・ストロースは、ソシュールの記号論的方法を民族学に適用し、未開社会における女性の交換という複雑で難解な現象に着目して、「交差いとこ婚」の深層構造を分析した。この構造は厳

- ・「ゲマインシャフト⁴¹」…人間の本質そのものの表現である本質意志に基づいて成立する共同体
- ・いずれも、無意識的な構造、表現を重視する
- ・無意識的な世界の本質的な存在（構造）への興味と解釈の方法としての科学という方法の習得【①】
しかし、これはあくまで神秘的な雰囲気を持つものである（科学的認識を絶対とする立場に対する批判⁴²）

子供の私は本のなかで、自然科学を学んだのではなく、世界を解釈することのよろこびを知ったのである。その後ながく私は、世界が解釈することのできるものだという事、世界の構造には秩序があるということ、決して疑ったことがなかった。(p.45-46,l.17,1-2)

- ・社会と文化の秩序をまず理解しようという、加藤の社会、文化に対する基本的態度へ【①】
- ・しかし、科学的認識や秩序の存在を当時、盲信し、解釈のための道具として使っていたことに対する反省もある（「自然科学を学んだのではなく」）

3.2 病床での体験…兼常清佐を中心に

私は今、原田三夫という著者の話の内容を覚えているけれども、その文体は覚えてはいない。兼常清佐については、逆にその話の内容をほとんどすべて忘れてしまったが、その独特のかたり口にはじめてであったときの、強烈な印象を、今も昨日のこのように思い出すことができる。(p.45,l.7-9)

- ・兼常清佐との出会い…『音楽の話と唱歌集』（『小学生全集』の中の1つ）を通じて

密な数学的モデルとして理論化され、多様な現象の背後に隠された無意識的な構造とみなされている。また彼はトーテミズム、儀礼、神話などの象徴体系をも解明し、文明人の思考に対する「野生の思考」の基底構造的性を強調している。」足立和浩「構造主義」『日本大百科全書（ニッポニカ）』

⁴¹ 「ドイツの社会学者テンニエスがゲゼルシャフトと対置して用いた語で、共同社会という訳語があてられ、ゲゼルシャフトとともに社会学の基本概念として用いられている。(……) 社会を成り立たせるのは人間の意志であるが、これは目的と手段との関係において本質意志と選択意志とに分けられ、本質意志に基づいて成立するのがゲマインシャフトである。選択意志が一定目的の達成のための合理的な手段の意識的な選択を意味するのに対して、本質意志は、人間の本質そのものの表現である。そこから生じる行為はそれ自体目的として欲せられ、ほとんど合理的に考慮されることなく、無意識的な気分や親切として個人に現れ、他者との一体感や慣習あるいは宗教として社会的に実現される。したがってこのような本質意志に基づくゲマインシャフトは、利害の一致に基づく一面的ないわば人工的なゲゼルシャフトとは異なって、人間の本質的な結合として、それ自体有機的な生命をもつ実在と考えられ、交換や売買や契約などの入り込む余地はなく、そこでは人々は全人格をもって感情的に融合し、親密な相互の了解のもとに運命を共にする。したがってそこでは、ときに人々が互いに対立することがあっても、なお人々は本質的には結合している。」居安正「ゲマインシャフト」『日本大百科全書（ニッポニカ）』

⁴² 科学的な知識を持つが、合理的な思考を外の世界に用いない「技術者」に対する批判は、後年の『「オウム」と科学技術者』（「夕陽妄語」2004年2月12日）等に見られる。

- ・『小学生全集』…小学校教育の補完を目的に、菊池寛・芥川龍之介によって編纂された全集
e.g. : 『イソップ童話集』や『日本剣客伝』などの古今東西の説話、文学、芸術

木村徳蔵『人類と生物の歴史』や原田三夫『児童工業物語』などの生物や工業に関する解説書

- ・加藤は『小学生全集』を全部読んだ…「百科事典的精神」へ⁴³
- ・加藤にとっての『小学生全集』…「科学的な知」を受容する元となった本の一つ⁴⁴
- ・兼常清佐『音楽の話と唱歌集』…上級生用に配当された、日本と西洋の音楽を解説

兼常清佐だけは、「皆さん」と書かずに、「諸君」と書いていた。「諸君は学校で小学唱歌というものを習っているだろう。あんなものが音楽だと思ったら大まちがいである。とにかく一度《冬の旅》を聞いてみ給え……⁴⁵」——それは決して誰にもわかりきった無害の事実を、猫なで声で喋ろうという文章ではなく、だれにもわかりきった真実というものはないという立場にたって、みずから信じることを訴えようとする文章であった。(p.45-46,l.17,1-2)

- ・兼常清佐の文章…著者の自己表出を抑え、子供への伝達性や教育性を優先するという特徴を持った『小学生全集』⁴⁶の中でも、『小学生全集』の中では珍しく、著者の好みや意向をはっきり書いた⁴⁷
e.g. 『音楽の話と著作集』中の「マルセーユの歌⁴⁸」の解説

西洋では、さすがに、音楽は日本よりは進んでいる。私は、西洋のこのような例を一つ、諸君に話そう。音楽の力、——というよりは、むしろ、美しいメロディの力がどれほど、力強いものか、という事がそれでよくわかるであろう。それはフランスの有名なうた「マルセーユの歌」の話である。

諸君は、もちろん、「マルセーユの歌」のふしを知っているだろう。今日でも、フランスの国歌といわれているくらいである。これこそ「鉄道唱歌」の様なくだらない、平凡なふしではない。人が唄っていれば、自分も一緒に唄いたくなって来る。唄うと心が浮き立って、じっとしてられなくなってくる。誠に愉快的なふしである。面白いふしである。日本にも古くから紹介されて、いろいろな文句で唄われた。諸君の知らないはずはない有名なふしである。⁴⁹

⁴³ 鷲巣力『加藤周一を読む——「理」の人にして「情」の人』岩波書店 2011, p.249

⁴⁴ 「ネアンデルタール人とかラザフォードの原子模型とか、そういう言葉を私が知ったのは、小学生においてではなく、『小学生全集』においてである。」加藤周一「兼常清佐」『高原好日』筑摩書房 2009, p.38

⁴⁵ 兼常清佐『音楽の話と唱歌集』には、この箇所は書かれていない。

⁴⁶ 宮川健郎「『小学生全集』と二十世紀の思想——博覧会と戦争」『日本近代文学』78号, 2008, p.268

⁴⁷ 川上央「収録書目解題 音楽の話と唱歌集」『兼常清佐著作集 別巻 兼常清佐ミクロコスモス』大空社, 2010, p.68

⁴⁸ 《ラ・マルセイエーズ》(《La Marseillaise》)のこと

⁴⁹ 兼常清佐「音楽の話と唱歌集」『兼常清佐著作集6』大空社, 2009, p.50 (初出『音楽の話と著作集』文芸春秋社, 1927)

私には彼が何をいっているのかほとんど全くわからなかったが、彼が訴えているのだということはわかったし、彼がみずから感動し、みずから考え、(……) 要するにその本のなかで生きているのだ、ということはわかった。私は兼常清佐の文章のなかに、文学を発見していた。(……) 純粋に文学的なるものを発見していたとさえいえるかもしれない。(p.46, l.2-5)

- ・自身の信念をはっきり語る文章…加藤の文学の定義⁵⁰へ
 - ・加藤の「文学」…作者の文学的体験(=特定の具体的経験)の特殊性、具体性に注目し、それを語るもの
 - 注目するのは、「言葉の意味と響き」、そして読者の想像力に訴えかける
 - ・兼常清佐への興味…「ピアニスト無用論」に対する言及、追分の駅で見かけたときのエピソード
 - ・独立した個人(e.g.寒山拾得⁵¹、一休、富永仲基 etc.)への興味
 - ・常に話す対象を同等にみる(白沙会での加藤周一)へ
 - ・既存の構造(科学的な知)を超えた人物、文学に対する興味【①】
-
- ・小結
 - ・原田三夫からの影響…科学的な知の受容
 - ・兼常清佐からの影響…「文学」の受容
- 「理」と「情」の部分の受容

4 父親との関係の変化

私は本を読み、多くの言葉を覚え、それ以上に多くの疑問をもっていた。その疑問をはらすために相談できる相手は、身の廻りでは父の他にいなかった。当然私は父と話し合うことが多く、そのものの考え方から強い影響を受けざるをえなかった。(p.47, l.3-5)

- ・父親からの「強い影響」…科学的な知⁵²
 - ・「一種の悪循環」(p.47, l.7-12) …小学校に行っても共通の話題が無い→父親との会話を楽しむ→さらに他の子どもたちと疎遠になる
 - ・「実証的なものの考え方を、日常生活にまで広げようとしていた。」(p.47, l.13-14)
 - ・母親や祖父の考えの否定 (p.47, l.14-16)
- ・それまで親しくはなかった父親との関係の変化…相談相手としての父親
 - ・疑問を問う子供とそれに答える父親という上下関係

⁵⁰ 加藤周一『文学とは何か』KADOKAWA, 2014 (初出 『文学とは何か』角川書店, 1950)

⁵¹ 中国、唐代の禅僧。雲水の豊干と三人で天台山(浙江省)国清寺に出入りし、ぼろをまとい、台所に入り込んで僧たちの残飯を食していたという。三人をあわせて三隠、三聖と称する。豊干の言によれば、寒山は文殊菩薩の化身、そして拾得は普賢菩薩の化身であったという。鈴木修次「寒山・拾得」『日本大百科全書(ニッポニカ)』

⁵² 加藤周一, 徐京植「教養に何ができるか」『羊の歌』余聞』筑摩書房, 2011, pp.256-257

- ・相談相手という条件付けの関係性

私はといえば、父の圧倒的な影響のもとで、人生に夢をもつことから始めて、次第に幻滅を感じるというよりも、先取りした幻滅をもって人生をはじめ、次第に夢をみずからつくりあげることになるだろう (p.48,l.11-13)

- ・「幻滅」＝現実と理想との距離感

- ・「児戯のばかばかしさ」にうんざりしても自分は子どもである（自意識を知った時期に当たる）。そのため、「子供は子供の役を演じるほかない。」(p.48,l.16)

(c.f. 「AUTOBIOGRAPHIE」『青春ノート VI1939年10月-1940年』)

- ・「自己嫌悪の一步手前」(p.48,l.17) へ

- ・理解者としての母親 (p.49,l.2) …「理解していたのは、むしろ当人ではなく、おそらく父でさえもなく、ただひとりの母親だけであった。」(p.50,l.1-2)

→母親による「救済」

- ・小結

- ・話し相手としての父親の存在…科学的、合理的知の受容…「高みの見物」にもつながる視点

- ・周囲との疎外状況からの救済としての母親…救済者、理解者としての女性を求めることにつながる

III. まとめ

- ・病床…加藤周一のその後の活動の萌芽としてのさまざまな体験の場

- ・一貫するもの…科学的な知の獲得による疎外

疎外からの救済者としての「母」の無限の愛情⁵³

- ・父親、読書から受けた「科学的」な知…その後の社会に対する分析的、観察的態度

- ・「母」の無限の愛情…周囲からの疎外の救済としての「愛」の受容

- ・大きな「理」の世界を支える、深い「情」の世界⁵⁴を作り上げる基礎的な体験…「病床」

「病床」の加藤がいた世界…「無条件の信頼と愛情のありえた⁵⁵」、家庭内・自己内で完結する世界では、外の世界との関係は？…「桜横丁」へ

IV. 考察——加藤周一の母親（織子）をどう考える？

- 「病身」はどう読まれてきた？

- ・成田龍一『加藤周一を記憶する』, p.243-244

- ・『羊の歌』全体＝自我的世界の成長史

⁵³ 加藤周一「京都の庭」『続 羊の歌』, p.41

⁵⁴ 鷲巣力『加藤周一を読む——「理」の人にして「情」の人』岩波書店, 2011, p.362

⁵⁵ 加藤周一「京都の庭」『続 羊の歌』, p.41

- ・「病身」＝加藤周一の内面史としての側面
 - ・「音の世界」、「本の世界」の中で、
- e.g. 「神話の意味」を見出すことに時間がかかったこと…軍国主義の神話の強制に巻き込まれなかった
神話には神話自体に意味があることを認識
するまでに時間がかかった

Q.あくまで加藤周一の「知」の側面に引き付け過ぎているのでは？

- 母親に対する、詩、小説を書いたのか？
 - ・加藤周一が詩を書くとき：強い感動を伴う経験をしたとき⁵⁶
 - ・「強い感動」＝愛、戦⁵⁷
 - ・女性の対する愛に触発されて書いた詩…「妹に」、「さくら横ちょう」etc.
 - ・愛を与える手段としての詩
 - ・では、母親に対する愛に触発されて書いた詩は？…今のところ見つからず
 - ・一方的、受動的に母親からの愛を受けたが、その死後、新たな「母」（愛情を加藤に与える人）を探すことに⁵⁸。しかし、加藤にとっての「母」は見つからず
 - ・母親を「書けなかった（書かなかった）こと⁵⁹」をどう考える？⇔父親、祖父からの影響は語っている
- e.g. 母親の死に対する反応（JOURNAL INTIME 1948 1949、「京都の庭」『続羊の歌』）
- ・母親への愛の表現＝晩年のキリスト教入信
 - ・伏線としてのカトリシズムへの接近…象徴主義のカトリシズムの側面を見る、岩下壮一への興味
 - ・加藤周一の生涯…「父」を内在しつつ、「母」へ接近していく過程
- e.g. 主観的な信仰の問題と、世界全体の規則性の問題との関係性（「宗教」と「科学」との関係性）
…道元、イグナティウス・デ・ロヨラ⁶⁰
- （原田三夫とも共通する点⁶¹）
- ・「父（秩序）と母（情）との相克」≡「雑種文化」⁶²としての加藤周一

⁵⁶ 加藤周一「あとがき」『加藤周一著作集 13』平凡社，1979，p.485

⁵⁷ 鷲巣力「解説」『加藤周一自選集 1』岩波書店，2009，p.477

⁵⁸ 加藤周一「京都の庭」『続 羊の歌』岩波書店，1968，p.41

⁵⁹ 海老坂武『加藤周一』岩波書店，2013，p.8

⁶⁰ 加藤周一，凡人会『ひとりでいいんです 加藤周一の遺した言葉』講談社，2011，p.132

⁶¹ 「晩年の先生〔注：原田三夫〕は『科学と宗教は相反するものではない』との信念を持たれ、新しい宗教観の確立を目指して、もっぱら宗教の研究に没頭されておられた。」西田光男「パラサイエンティフィック―原田三夫先生のこと」『生産と技術』30巻1号，生産技術振興協会，p.31

⁶² 『羊の歌』を執筆した意図について加藤は「雑種文化を一般的な社会の分析として提示するだけじゃなくて、一人の人間のなかに雑種文化がどういうふうにあられるかということに叙述してみようと思ったんです。」（加藤周一『20世紀の自画像』筑摩書房，2005，p.59）と、「雑種文化」をもとにして書いたことを述べている。